

受難と再生の語り : 文体よりみた『説経節』の世界

岩崎, 武夫 / IWASAKI, Takeo / イワサキ, タケオ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

52

(開始ページ / Start Page)

8

(終了ページ / End Page)

19

(発行年 / Year)

1995-07-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019840>

受難と再生の語り

——文体よりみた『説経節』の世界

中世末期の民衆社会の中から創造された『説経』の世界は、様々な話素を含みながらも「受難と再生」のモチーフを基軸に展開している。

五説経といわれる「信徳丸」「山椒太夫」「小栗判官」「苜蓿」「愛護の若」には、主人公のそれぞれが苛酷な運命に翻弄され、これ以上は生きられないところまで追いつめられており、死を決意せざるをえない状況の中で、深い懊悩と絶望と沈黙を強いられている。

そこまで主人公を追いつめ、追いつめる語りが説経だといってもよい。そして追いつめた果てに再生（蘇り）が訪れるのだが、この使い古されてはいるが、常に人々の心を動かし、一縷の光りを投げかけることばは、聞き手（読み手）の現在及び未来に向けての期待感を、何程か満たしてくれるという点では、今も昔も変わりはない。

「受難と再生」をめぐっての五説経の語りは、曲折にとんだ物語を織り上げており、その詳細については、『さんせう太夫考』『続さんせう太夫考』で尽くしていると思われるので、この稿では、主として説経の文体―語りことばの特色に留意しながら作品分析を行ない「受難と再生」のモチーフが、どのようなプロセスを経て具体的に確認で

きるか検証することにした。取り上げる作品は紙数の都合もあつて「信徳丸」「山椒太夫」「小栗判官」に限定する。

信徳丸

一 干死と回心をめぐって

継母の呪いを受けて癩に犯され、河内国、高安郡信吉長者館を追放されたしんとく丸は、天王寺に捨てられるが、異例（業病）となつたわか身をかこちながら、

さては謀り、お捨てあつたは治定なりたえばお捨てあろうとも、捨てる所も多いに、天王寺にお捨てあつたよ曲もなや、蓑と笠とは雨露しのげと、これは父御の御情けか、杖は道のしるべなり、円座は馬場先に出、花から（施し）乞えと仲光（郎等）が教えかな、たとひひじに（干死）申せばとて、袖乞いとて申すまい

とひじり（聖）きつておわします

異例に犯されたわが身を衆目にさらして袖乞い（乞食）など、たとえ飢死したとしても断じてすまいと、生きることを頑なに拒否したしんとく丸の態度が目につくが、「信徳丸」にはこの干死（ひび）ということが、これ以降何回かでてくるが、いずれも生と死の境を綱渡りのように行来するしんとく丸の心の揺れをとらえている。しかし清水の観音が夢枕に現れて、人の呪いによって病を得たのだから、町屋へ袖乞いをして命を継げのお告げがあり、しんとく丸は干死の決意を翻して、

「あらありがたの御夢想や、異例も受けず、父にぞんき（損気）機嫌をそこねる）申して袖乞いを申すにこそ、わが身の恥であるうけれ、異例を受けたに、親の身として育みかねお捨てある、袖乞いを申すにこそ父御の御面目にてあるべきに、さらば教えにませ、袖乞いを申さん

飛躍と曖昧さのあるこうした表現でしか、内心の揺れを語りえない、しんとく丸の心の褻（ひだ）が明るみに出ているが、現代語に訳すと

病にも罹（か）らず、父の機嫌をそこね、袖乞いをするのは大きな恥ですが、継母の呪いによって病を受け、親として育みかねて捨てたのですから、袖乞いをして命を継いだとしても少しも恥ではない。もし恥ということばがあるなら、それは父の名誉、体面にかかわること、わが身の恥ではない。

観音の夢告が大きな力になっているのは無視できないが、この告白には、癪に病みながらも袖乞いをして生きようとするしんとく丸の回心と決意が感じとれる。

二 傷心と怒り

観音としんとく丸の関係を軸に、これ以降物語は深化の方向をたどることになるが、再び夢枕に立った観音は、しんとく丸に熊野の湯（熊野本宮に近い湯の峯温泉）に入つて本復せよと告げる。「小栗」の物語と同じく、熊野の湯が病平癒の切り札として語られているが、説経と熊野の関係は、受難と再生のモチーフを実現する上で貴重な役割を果している。

しかし物語は、熊野の介入によってただちに終局を迎えるわけではない。観音の夢告はこの菩薩が本来的にそなえている慈愛の発露から行われたものであるが、しんとく丸にとっては自らを貶（おとし）めるワナにも等しい辛苦の体験を味わうことになる。

ことばを代えたと、語り手（作者）が観音の夢告を逆手にとつて、しんとく丸を退（の）引きならぬ生死の瀬戸際に追いこむための仕掛であったともいえる。天王寺から乞食非人の姿で熊野に向つたしんとく丸は、途中和泉国近木庄（こきのしょう）で、許婚の乙姫の屋形とも知らず、齋料（しきりょう）（施し物）を乞うために中に入り、その醜い姿を女房達に笑われて激しい屈辱感を覚える。

そのところの語りは、説経独特の、聞き手の心（魂）を揺り動かさずにはおかない、突き上げるような切迫感がある。

病（やま）さまさま多けれど目が見えねばこそもの憂けれ、目が見えねばこそ、かくまい恥をかくことよ、たとい熊野の湯に入りて病本復したればとて、この恥をいづくの浦にてす、ぐべし、天王寺へ戻り、人の食事を給わるとも、はつたと絶つて干死にせんと思し

めし、近木庄よりひんもどり、天王寺引声堂に、縁の下へとり入りて、干死にせんと思しめし、信徳丸の心の中、あわれともなかなか なにたたとえんかたもなし

説経に類出する繰返しの語法は、その倦むことのない反復と単調さにも拘わらず、逆にしんとく丸の受けた傷心の深さを的確にとらえており、それは譬たとえていえば、熊野の湯に入つて病はすすぐことはできても、心の傷はすすげないと、すすぐということばに託した意味の重さとなつて聞き手（読み手）を撃つ。

更に食事をはつたと絶つてとか、近木庄よりひん戻りというような、めりはりを際立たせる、それ自体は何ということもないことばが、しんとく丸の傷心と同時に、激しい怒りを訴えていて、語りことばとしての捨て難い力がある。

三 死なれぬ命のことなれば

信徳丸の物語は、このあと乙姫の側に視点が移り、しんとく丸の身を案じた乙姫が巡礼に様を変え、諸国を歩いてその消息を尋ねるといふ展開になる。熊野路の半ば、藤白峠まできたとき、熊野への旅を断念した乙姫は、天王寺に引き返し、引声堂の縁の下でしんとく丸と劇的な対面をする。干死（餓死）を覚悟したしんとく丸は生きながらえており、引声堂の後堂から弱りきつた声で、

旅の道者（旅行者）か地下人（土地の人）か、花がら（施し物）賜たまへ

と袖乞い（たもとねがひ）をしている。

しんとく丸が死んでは物語はそこで終りである。再生譚のモチーフ

からいえば、生かしておいて復活（社会復帰）させるというのが筋であり論理である。しかしあれほどくり返し、干死しようと覚悟したしんとく丸を、どのような論理によつて翻意させるのか、そのところはやはり問題である。死んでは元も子もないが、たとえばしんとく丸の死と対面した乙姫が、悲歎の末に、その骸を丁寧に供養し、後に寺を建てるという方法もあるし、思い切つて乙姫もしんとく丸の跡を追つて自害し果てるという、やや近世的な後追い（心中的な）終り方もある。こういう悲劇的な結末を想定するのも、干死せんと決意したしんとく丸の心情を最後まで貫かせようと思へはこそである。

しかしながら、しんとく丸は乞食して生きていた。乙姫はしんとく丸の内心の葛藤など一切お構いなく、喜びの余り抱きついて、名を名のつてくれと涙を流す。追いつめられたしんとく丸は、それまでの経緯をくり返し打明ける、

「名のるまいとは思へでも、今はなにをかつつむべき、乙姫殿かや恥づかし、乳母（ちごき）の母に過ぎおくれ、継母の呪いにて、かようの異例（業病）を受けたるぞや、親の慈悲なるに、わが親の邪慳（じやくけん）やな、天王寺にお捨てあつてござあるが、熊野の湯に入れ、よいと聞き、湯に入らばやと思ひ熊野を訪うて参りしに、盲目のあさましや、御身の屋形と知らずして、施行を受けに参りてあれば、女房たちの、お笑いあつたを聞きしより、面目（めんぼく）（面目ない）と思ひ、干死にせんと思へども、死なれぬ命のことなれば、巡り合うたよ恥づかしや、これよりもお帰りあれ、

乙姫この由聞こしめし、御供申さぬものならば、なにしにこれまで参るべしと、しんとく丸取つて肩にかけ、町屋に出でさせたまへば、町屋の人は御覧じて、これをあわれとみな感ぜぬ者はなし

引声堂の縁の下にくぐまり籠りながら、干死せずに乞食して生命を
継いでいるのは、絶望感から自己喪失に落ち入り、干死という意志的
な行為をなしくずしに放棄したからではない。むしろ逆であつて「干
死せんとは思えども死なれぬ生命のことなれば」に端的に示されてい
るように、死のうとして死ねないのが人間の生命というもので、
という生命への再確認、再発見であつた。

陰の主役観音の霊夢と熊野の湯の効験は、しんとく丸の再生にとつ
て重要な契機となつてゐるが、死のうとして死ねないのが人間の生命
なのだという、生命についての認識の深化、変革こそが再生のための
必要不可欠の条件であることを訴へてゐる。別なことばでいえば、神
仏を軸にし、それとの関係の中で消極的にしか考えられなかつた生命
についての認識が、中世的な制約があるにせよ死ねないから生きてい
るのだというひらき直りともいえる生命それ自身の営みとして自覚さ
れてゐる点に新しさがある。さりげない表現の奥に隠されてゐる意味
は重い。

闇を通つて光りある場所へと、観音との関係を軸に、屈折した意識
の変転を経てともかくも、しんとく丸が到達した究極の世界が、この
ことばに集約されてゐる。

乙姫が救世主のように現れたのは、このときであり、しんとく丸を
肩に掛けて町屋を乞食するイメージは、乞食という行為が再生へと反
転するための聖なる行為であることを言外に示したものである。

山椒太夫

一 地藏靈験譚を超えた語り

山椒太夫の語りは、地藏菩薩の靈験と切りはなしてはとらえられな
い。この語りは冒頭の丹後由良の金焼地藏の本地物という形式をとつ
てゐることでもわかるように、広義の意味では地藏の靈験譚である。

またその地藏は、肌の守りの地藏菩薩といわれているように、終始
主人公の肌身に付けられた小形のもので、身代り地藏であつたことが
わかる。全容を通して身代りの奇跡が起こることが三回ある。一つ
は安寿とづし王が太夫のために額に当てられた金焼の跡を地藏が引き
受けることとあり、その二は、有名な国分寺の場で、太夫の追跡を
のがれて国分寺に入ったづし王が、聖の庇護を受けて皮籠の中へ身を
隠したものの、太夫の三男三郎の執拗な詮索に合い、露見寸前に身代
り地藏が靈験を示して太夫一族が退散する場面である。その三は、蝦
夷が島に売られ鳥追いをする盲目の母の眼に、づし王が身代り地藏を
押し当てて開眼させるところである。

地藏が切り札としてあらわれ、づし王の危機を救う国分寺の場面は、
受難と再生のモチーフが劇的に語られてゐるところであるが、地藏の
介入こそないが、づし王が最終的に復活する端緒となつた天王寺の場
面も同じである。二つの場面の考察を抜きにしては「山椒太夫」は論
じられない。

二 身代り地藏と安寿

しかし、この二つの場面以前に「山椒太夫」の作品としての生命にふれ、受難と再生のモチーフを予言的に語るところがある。それはこの作の実質上の主人公安寿と、身代り地藏をつき合わせ、退引ならぬ関係として語る重要な場面でもある。先に紹介した一回目の例がそれであるが、抽象論は避けて、文脈を追って具体的に掘り下げ、何が問題なのか、その核心に迫ることにしたい。

金焼きの刻印を打たれ、そのうえ、松の木湯舟の下で餓死直前にまで追いこまれた命を太夫の二男二郎の慈悲で救われた安寿とづし王は、二人連れ立って山行きを志願し、山仕事に就くことになるが、その道すがら、

とある獣道ししみちをお上りあるが、雪の斑消むらさえたる 岩の洞に立ち寄りて肌の守りの地藏菩薩を取り出し、岩鼻に掛け申し、「母上様の御錠には、自然姉弟が身の上に、もしや大事のあるときは、身代りにもお立ちある、地藏菩薩とお申しあるがなくなり行けば、神や仏の勇力ゆうりきも尽き果ててお守りなきか悲しやな」づし王殿は聞こしめし、姉御の顔を御覧じて、「のうのういかに姉御様、さても御身の顔には焼金の跡も御ぎない」とお申しする。

姉御この由聞こしめし、「げにまこと御身の顔にも焼金は御ぎないよ」地藏菩薩の白毫びやくごう所を身奉れば、姉弟の焼金を受け取り給い身代りにお立ちある。「そもやその焼金をお取りなさるものならば、あの邪慳じゃけんなる太夫三郎が、また当ちあようは一定いちじょうなり、痛うも熱うもないように、御戻しあつて給はれの」なにか一度再び身代

りにお立ちあれば、後へは戻らず、「さてもよいみみようせせ(冥助)なや、これをついでに落ちさいよ、落ちて世に出てめでたくば姉が迎いに参らいよ」——略——「今日は肌の守りの地藏菩薩も御身(づし王丸)に参らす。自然落ちてありけるとも、たんじょう(短情)なる心をお持ちあるな、たんじょうはかえつて未練みれんの相さうと聞いてあり 落ちて行きてのその先で在所(村)があるならば、まず寺を尋ねてに、出家をば頼まいよ、出家は頼みがいがあると聞く、もはや、落ちよ、はや落ちよ、見れば心の乱るに：安寿の視点で語られているこの部分に、すでに『山椒太夫』の展開が、どのような起伏を辿り、いかなる結末に導かれるかが暗示されている。岩鼻に掛けられた身代り地藏は、もはや靈験を失った只の木偶でくにすぎないものとして安寿の眼には映っている、

「神や仏の勇力も尽き果ててお守りなきかよ悲しやな」

ともらすことばには神仏からも見離されてしまったというより、身代りの靈験を示して救済しない地藏に対する不信感が、悲しみとひとつになつて告白されている。

づし王のことばに触発されて互の顔から焼金の跡が消えているのを発見するのはこの瞬間である。語り手(作者)の作為さくゐとはいえない作爲さくゐのうまさが目立つところである。

通常の地藏菩薩靈験譚であれば、ここがひとつの見せ場、話のやまでもあつて、ここを切り抜けると一気に終熄に向つていく。^{注①}

予想さなる筋書きは、二人の姉弟が無事太夫の暴力から解放され、もとの身分に復帰し別れた母や、流罪中の父とも対面するというもので、太夫に対する報復も、地藏自らが行う厳しいものとなる。

しかし、そんなふうにならずに万事好都合に運ばないのが説経である。

安寿はあれほど切望した地代り靈驗を目の当たりにして、事もあらうに焼金の跡をもう一度戻してくれと地蔵に嘆願する。

前後の意識のつながりに飛躍があり、とりようによっては矛盾しているともみえる際どい展開である。だがこの際どい意識の転換を通して訴えているのは、地蔵の身代り靈驗の不思議な力は疑いえないとしても、そのあらたかな効験を超えて、山椒太夫の悪—カリスマ的な支配者のもつ暴力の恐ろしが、否定できない現実として認識されているということである。地蔵に信を置きながらも、それによっては克服できない悪の存在が蔽としてあるということをお安寿の視点を通して確かめているともいえる。

運命を見透す安寿の賢ささというか、焼金が元へもどらぬことを知ると、これをひとつの啓示としてづし王に逃亡をすすめる。地蔵への哀訴から嘆願へ、そして動かぬ事実を前にすると、すばやく意識を切りかえて逃亡をうながす。このみずからを含めてづし王の運命を先取りして適切果敢な指示を下すよみの深さのなかには、安寿自らの死も予告されている。

「落ちて世にでてめでたくは、姉を迎いに参らいよ」

のことばには、祝福すべきバラ色の未来とは逆の死の臭いが漂っている。

三 安寿の自己犠牲—供犠的な死について

しかしなぜ二人は一緒に逃亡しなかったのだろうか。素朴な疑問がないわけではない。その可能性は充分ありえたにも拘わらず、安寿は残りづし王一人が脱出する。

あれこれの合理的な説明をすてて、虚心になって考えると、自らの死を代償にしなればづし王は逃げ、おおせないとする、中世的、あえて中世的な限定を加えた自己犠牲という行為にいきつく。己れの運命を甘受したもののみがないうる、他を生かすことによって自らも生きる中世的な自己献身の在り方である。

これと同じとはいえないが、神話や伝承の世界—説話、伝説、縁起に散見する筑堤や筑島、あるいは橋梁を強化するために捧げられた人柱の問題がある。^{注②}少しこだわると、これらの場合は公的な秩序維持や社会生活上の必要から生じたもので、犠牲となる人々の個人的な意志は否定され、無視されるケースが多い。もつとも一方では、進んで人柱を志願し、死後神として祭られる話も普遍的に存在する。

安寿の例は後者に近いといえるかも知れないが、公的な使命感などはなく、ひたすら個人としてのづし王の再生を願う心が選んだ意志的、主体的な自己犠牲といえる。

づし王脱出の後、山椒太夫の屋形にもどった安寿は、づし王逃亡の責を問われて惨殺される。(寛文七年板「さんせう太夫」では安寿の死骸は太夫によって野に棄てられ、犬や鳥の餌になっている。)しかし、これは安寿にとって予期されていた結末ではなかったか。

太夫の前に人柱のように身を投げ出すことで死を呼び入れ、供犠的なその死を代償(贖い)にして、づし王の逃亡と再生を確実なものに仕上げようとしたのではないか。

火責め水責めの太夫の拷問に泰然と耐える安寿の姿は、太夫の前に捧げられた供犠そのものであるが、づし王の苦を贖う代受苦者としての役割りもある。これは代受苦を本願として罪人を救済した地蔵菩薩の姿と重なる。

十三世紀半ば頃に成立した絵巻『地蔵菩薩靈驗記』^{注③}に、修験者延好か立山に登攀したときの夢中の体験が描かれているが、地獄の業火に焼かれて悶絶する女性に代って、地蔵が火炎に包まれて身を横たえているところがある。赤い炎の中の小さな温顔が何ともいえない美しさを湛え、よく見ると女性の顔の表情に似ている。

づし王を生かすことだけに全力を傾けた安寿の思慮深さ、やさしき、果敢な行為、そして運命を見透す予言者の相貌が、地蔵の温顔と二重写しに浮び上ってくる。

四 首引きの修羅、太夫の処刑

再生後のづし王によって行われた山椒太夫の首引きの刑は、異様ともいえる雰囲気のもとに始まる。安寿の存在とその死は、づし王の再生にとって動かし得ない意味をもっていたが、しかし逆の立場、づし王の側からみれば、安寿の死は痛恨の極みであり、太夫に対する報復も常識を超えた峻烈なものにならざるをえない。

三郎に鋸が渡る、邪慳なる三郎が、この鋸を奪い取って、「卑怯なりやかたがた、主の科をばのたまわで、われらが科とあるからは、のういかにう太夫殿、一期（一生）申す念仏をば、いつの用に立て給うぞ、このたびの用にお立てあれ、死出三途の大河をばこの三郎が負い越して参らすべきぞ」一引き引きては千僧供養、二引き引きては万僧供養、えいさらえいと引くほどに、百に余りて六つするとき、首は前にぞ引き落とす

悪が悪を裁く。三郎が鋸とつて父の太夫の首を引くこの処刑の方法は、歌い文句のような「一引き引きては千僧供養」のリズムに乗って、

その一引き一引きが、太夫の魂を奈落の底へ送りこむ働きがあるが、同時にその一引きが千人の僧の供養にも匹敵する悪霊鎮魂の意味も担っている。こうした両義的な処刑の方法を創るに至った「説経」の想像力の斬新さにまず敬意を表さねばならぬが、その処刑が惨忍であればある程、太夫のカリスマ的な悪の巨大さが鮮明になるという語りの仕掛けにも注目したい。

そしてこうした仕方では太夫の悪を葬ることによってはじめて供犠的な安寿の死は贖われたのであり、安易な妥協や和解によっては真の癒しとはならなかった点に目を向けるべきである。

『山椒太夫』の結末が、慈悲を第一とする『地蔵菩薩靈驗譚』を超えたづし王による復讐劇になっているのもそこに理由がある。

小栗判官

一 餓鬼とは何か

小栗の受難（死）と再生を扱うには、小栗が餓鬼として蘇りたいきさつを抜きにしては不可能である。

あらいたはしや小栗どの、髪はははとして、足手は糸より細うして腹はただ麻利をく、たようなもの、あなたこなたと這いまわる。

これは相模国藤沢（遊行寺）の北に当る上野が原の塚を破って、この世に現れた小栗の姿であるが、しかしなぜ小栗は餓鬼として蘇ってきたのか、そもそも餓鬼とは何か。

一般的にいえば、餓鬼とは死者の霊をいう。生者からしかるべく供養を受けて、望ましい世界に生まれ変わることを願ったり、餓鬼憑きの名の通り、よく人に憑いたりもする。また六道の内の餓鬼道の住人で、生前嫉妬深く、物惜しみや、むさぼる行為をした者の赴くところで、常に飢渴に苦しんでいるのが最大の特徴であるといわれている。^{注④}

十二世紀頃に成立したと思われる絵巻『餓飢草紙』^{注⑤}をみると、餓鬼が貴族の邸であろうか、遊宴に耽る人物の前方から、あるいは背後から、高杯に盛った食物を狙っているところがある。また市中の雑踏にまぎれて、供養塔に供えた水をすするものもある。衝撃的なのは、町角で排便する男女に群がる不気味な餓鬼の姿で、陰惨としかいいようのない光景である。

しかし奇妙なことに（当然のことかも知れないが）その場に居合わせる貴族や庶民の眼には餓鬼の姿は全く見えていないし、意識されてもいない。見えているのは絵師一人ということなるが、絵全体の構図が、現実と非現実が入り交ったひとつの幻視の世界として、そこに這いまわり蠢く餓鬼の姿が怪異な実在感をもって迫ってくる。

小栗の場合はどうであろうか、慶長期の浮世絵師、岩佐又兵衛の絵巻『小栗』^{注⑥}を参考にすると、『餓鬼草子』と異なるのは、作中に登場するすべての人物に餓鬼となった小栗が見えていることで、幻視から明視されるものとしての形象の変化がある。目には見えない苦の餓鬼が見えるものとして地上化したことは、それがもはや冥界のものではなく、この世のものとして顕在化したことを意味している。現実の次元に浮上した餓鬼とは一体いかなるものか、という問いに入る前に、小栗の蘇生について若干ふれておく。

二 冥界蘇生譚について

物語の伏線として、横山一門に毒殺された小栗主従は、博士（占い師）の占いによって、小栗一人は土葬に、家臣は火葬にされることになるが、火葬の場合は骸がなくなるので蘇りはなく、小栗だけが土葬であつことが幸いして蘇ることになる。

『日本霊異記』（九世紀成立）『今昔物語集』（十二世紀初成立）には多くの冥界蘇生譚があるが、冥界からこの世に蘇ってくる人物は、例外なく自らの死体を焼くことを禁じ、死後三日〜七日程の期間をおいて復帰している。『霊異記』に例外が一つある。それは主人公の女性が死んで閻魔の庁に召されたものの、寿命が尽きていないという理由で娑婆にもどされる。しかしすでに自分の屍が焼かれていたために、他の女性の屍に入つて蘇る話である。（中巻二十五話）

靈魂と肉体の分離、二元論的な觀念を前提にしないと冥界蘇生譚は成立しないが、魂と肉体が別なものとして結合する、この種のもものは、中国の説話や民間伝承には古くからあつて、これを借屍還魂^{注⑦}といい、多くの興味深い例がある。

『霊異記』の冥界蘇生譚を検証すると、冥界に堕ちて再びこの世にもどる人物については、蘇りの理由となる因果関係についてくわしく記述している。

漢神（鬼神）に生贄として供えた牛の怨みを買つて冥界に呼ばれた男が、一方で放生の功德を行つていたために善悪が計量されて、善が勝りこの世にもどされる話（中巻五話）

死に別れて冥界にいる妻の訴えで、閻魔の前に連行され、裁きを受

けることになった男が、結局は妻の訴えが不当であることが判明して許され、そのついでに地獄めぐりをして娑婆に帰ってくる話（上巻三〇話）

また生前、生仏といわれた行基菩薩をねたみ、そしつた罪で無間地獄に墮ち、様々な苛責を受けた後、罪障が祓われて蘇った智光法師の話はよく知られている。（中巻七話）

下巻三十七「因果を顧みずして悪を作し、罪禍を受けし縁」には、佐伯宿伊太知なる者が、閻魔の庁で生前の善悪の行業を計量され裁きを受ける。これまでに見たことがないと閻魔が喘息しているように、この男の罪は法華經の經文の全字数、六万九千三百八十四字よりもお多く、地獄の責苦は免れず、蘇生は不可能となる。他の話と違うのは、これら一部始終を傍で目撃した第二の男が蘇って家族に知らせ、追善供養と法華經書写の功德によって伊太知の霊を弔うという結末にある。

因果の理が貫徹している『靈異記』では、死んで冥界に赴いた者は、その善悪の業が計量され、善行多い場合は蘇り、悪行超過のときは地獄にとどまるというのが話のパターンである。また蘇った後は、本人ならば敬虔な仏教信者となって因果の理を守り、法華經や般若心經の読誦・書写を専にし、蘇ることのできぬ靈魂については、追善供養して救済している。

三 小栗の蘇り

小栗が冥界に墮ちた理由は判然としないが、彼を目の前にして閻魔が、

さてこそ申さぬか、悪人が参りたわ、あの小栗と申すは、娑婆にありしそのときは、善と申すは遠うなり、悪と申せば近うなる大悪人の者なれば、あれをば悪修羅道へ墮すべし
と大悪人であることを明言している。

小栗が悪人であり罪を犯しているとすれば、彼が生前、常軌を外れた行為が多く、慣行や秩序を乱して社会的に不安動揺を与えた、いわゆる不調人であったことがあげられる。

七十五人の妻嫌い（離縁）をはじめ、深泥池の大蛇（龍蛇）との契約、これは常軌を逸した行為に当り、豪族横山にことわりもなく、その一人姫照手と通じ、強引に婿入りするところは慣行を無視した武門に対する侵犯を意味している。不調人小栗のこうした罪障が閻魔に見抜かれ、裁かれているわけで、小栗の善行は問題でなく、因果の理に照らしても彼には蘇生のチャンスは全くなかった。

その小栗がこの世に蘇ったのは、十人の家臣が身代りとなって罪を引き受け、閻魔に直訴したからである。これは因果の理を重視する仏教話の蘇生譚には全く例がない。物語に固有の筋の継起的なつながりを優先させた、見方によっては便宜的な展開といえよう。

しかしともかくも小栗は家臣の身代りを代償にこの世に蘇ったのである。

四 小栗における餓鬼の意味

ここでようやくはじめに設けた問題にもどるわけだが、小栗はなぜ餓鬼として蘇ったのか、その解明である。

土葬にしたのだから小栗の屍は残っているわけで、小栗の靈魂は自

らの屍に入つて蘇るといふのが『靈異記』や『今昔』の例に照しても
妥当な形である。しかしこのところは微妙で、小栗は自らの屍であ
りながら餓鬼の姿をとつて蘇つたのである。

これは彼が生前侵した罪障が消滅せず身体化したものといえる。別
なことばでいえば、罪障をこの世に持ち込んで蘇つたのが餓鬼身であ
るともいえる。罪障とは本来形にならないものであるか、それを即物
化し、穢れ^{注⑧}の感覚を伴つたグロテスクな姿態として表出したのが餓鬼
である。また地上化した餓鬼とは、正しくいえば、この世のものでは
なく、またあの世のものでもない、その中間に位置する境界的な存在
であつて、小栗が蘇生を完了するためには、餓鬼の姿を払拭して人間
として再生しなければならぬ。

そのために考え出されてのが熊野本宮湯の峯の湯の効験であり、そ
こに至るまでの遠大な道行——小栗が餓鬼としてこの世に現れた藤沢
の遊行寺（上野ヶ原）から熊野本宮湯の峯に至る道行——であつた。

五 餓鬼車の道行

湯の峯の湯の奇跡がなければ小栗の再生はなかつたが、そこに至る
までの遠大な時空の流れが、小栗の罪障を消滅させるべく丹念に語ら
れており、それが道行の時空であつた。

土車に餓鬼の小栗を乗せ、男綱女綱をとつて熊野へと引いていく、
その街道にひき寄せられるように集まつてきた人々の中に、熊野とは
ゆかりの深い時宗の聖をはじめ、照手がいる。仇横山家中の者までも
綱を引く。勿論主役は名もない民衆であつて、リレー式に宿送り村送
りして参加している。

東山道青墓の宿で、水仕として労役に従う照手が、この車引きの道
行に加わるときは巫女の姿である。照手は物狂いに身をやつして笹の
葉に幣をつけ、引き手の前後に立つて車を誘導する。これは死んだ小
栗の霊を供養する動機からであるが、罪穢が外化した餓鬼の小栗を浄
化する意図が根本にある。供養と祓いの両義性を兼ねた巧みな演出で、
前途に小栗の蘇りを予測させるものがある。

音にも聞いた清見寺 江尻の細道、引き過ぎて、駿河の府内に
入りぬれば、昔はないが今浅間、君の御出でに、みよすがなや、
蹴上げて通る鞠子の宿、雉がほろろを撃つやの、宇津の谷峠を
引き過ぎて、岡部驛を、まんのぼり、松にからまる藤枝の、四方
に海はなけれども、島由の宿を、えいさらえいと引き過ぎて、七
瀬流れて、八瀬落ちて、夜の間に変る大堰川 鐘を麓に菊川の、
月さしのぼす小夜の中山、日坂峠を引き過ぎて、雨降り流せば露
地悪や、車に情を掛川の、今日はかけずの掛川を えいさらえい
と引き過ぎて、袋井驛を引き過ぎて、花は見付の郷に付く あの
餓鬼阿弥が明日の命は知らねども、今日は池田の宿に着く

東海道の宿駅を連ねた道行の一節だが、くり返しの語法や掛詞、縁
語を使つてのリズミカルな進行は、聞き手の耳に快いひびきを残す。
地名を横に並べただけの単彩素朴なものであるが、土車を引くその一
引き一引きには大地を踏みしめるようにして進む軽快さとは裏腹に重
厚さもある。しかしそれだけではない、「雨降り流せば露地悪や」の句
などは、細部にこだわることで臨場感を出しているし、「えいさらえい
と引き過ぎて」の力強い合の手^⑨の度重なる挿入は、実際に車を引いて
いるような錯覚に聞き手を誘い込む。

こうした道行の世界の基調にあるものは何かといえれば、「一引き引き

ては千僧供養、二引き引きては万僧供養、えいさらえいと引くほどに」の聞き覚えのある語り口である。これはすでに「山椒太夫」のところで使われており、ここでは竹鋸の一引き一引きが太夫の首を引き落とす処刑の意味があったが「小栗」の場合には、その一引き一引きは餓鬼車の綱手を引く意味に変えられている。奈落へと悪霊が下降していく、いわば太夫にとっての負の道行（死出の道行）に対して、これは蘇りへの手ごたえが、着実に一引き一引き毎に、聞き手に送りとどけられている開かれた陽の道行（再生への道行）とでもいえよう。

小栗における受難（死）と再生のモチーフの具体的な把握は、起伏のある物語性をどうとらえるかということ、餓鬼についての広い視野に立った分析、それとともに再生への契機となった道行のより精緻な説明を必要とするであろう。

※ 小栗の道行をとらえるには、小栗個人の罪穢を消滅させるという見方を外してみることも大事かも知れない。街道に出て餓鬼車の綱手を引く人々、その背後にある村落共同体の存在、そして更により大きな国々に所属する人々、それらの人々が日常生活の中で担わざるを得ない種々の罪穢を、餓鬼阿弥小栗に託して流し捨てるといふ祓いの意味が、この道行にはもう一つの隠された動機として指摘できるかも知れない。

唐突かも知れないが、古代社会において、六月と十二月の晦日に、内裏の朱雀門で行われた大祓のことが想起される。全国の罪という罪を、ことごとく川から海へ、そして海底の根の国へと流し去った儀礼のことである。大祓の祝詞（詞）にはその経緯がくわしく記述されている。擬人化された神々が、それぞれ川、海、海底（根の国）の拠点を分掌し、小栗の道行と同じようにリレー

式に罪穢を根の国へと送りこむ、力強くエネルギーシユな映像を喚起する壮大な海の道行となっている。

種々の罪穢れを担わされた餓鬼阿弥の小栗が目指す熊野は、死者の国であり、他界への入口でもあって、根の国とも密接に関係する。単絡的な対比は避けなければならぬが、擬人化された神々は、さしずめ、時宗の聖であり、巫女であるであり、熊野山中を誘導した修験山伏ということになる。しかし全国の種々の罪穢を担った餓鬼の小栗を、根の国熊野へと運んだのは無名の民衆の参加であった。

それが、えいさらえいの掛声とともに、宿送り村送りのリレー方式で、遠大な道行の時空を踏破し、小栗を熊野に送りこんで蘇らせた真の主役達である。比喩的にいえば、大祓の祝詞の中で、この民衆の役割りに当るものはない。しかしあえて探せば、罪という罪をことごとく海底の根の国へ送りこみ流亡させた海流の力、エネルギーこそがそれに比定できるかも知れない。

罪穢を消滅させる儀礼としての古代の大祓の詞と、中世末期の語り物「小栗」の道行を対比させた、その強引さに問題はあるにしても、二つの世界に通底するものがあつたのは大きな、一つの発見であった。

・ 大祓の祝詞についてのすぐれた分析に西綱信綱「古代的コスモスの一断面図、——大祓の詞覚え書——という論考がある。
平凡社「月刊百科」一九九五・三

注1 『三因縁地藏菩薩靈驗記三』（古典文庫、十「下女火印免事」）
注2 『日本書紀』仁徳天皇七年十月

河内の茨田堤を築いたとき、天皇が夢知らせによって武蔵の強頸と河内の茨田連杉子の二人を河神の犠牲にしたことがみえる。その他、兵庫県垂水の長柄の橋の人柱伝説は有名。

注3 『絵巻・地藏菩薩靈驗記』
(中央公論)

注4 『仏教辞典』餓鬼の項
(岩波書店)

注5 『餓鬼草紙・地獄草紙・病草紙・九相詩絵巻』日本絵巻大成七
(中央公論)

注6 岩佐又兵衛(一五七六—一六五〇)

元和・慶長期に活躍した画家。風俗画に独自の個性を発揮した作が多いが、古浄瑠璃や説経節の正本を素材にした絵巻『山中常磐』『堀江物語』『上瑠璃』『小栗』がある。

注7 沢田瑞穂『地獄変』『餓鬼談義』『中国の呪法』(平河出版社)

再生後の小栗が、諸本には以前の小栗とは別の肉体をもった人物のように描き変えられているが、これは借屍還魂に近い形である。しかしどの程度語り手(作者)がそれを意識していたか疑問である。こうした展開は、再生した小栗がもとの小栗ではないために、後に父兼家との対面や、照手との再会の場に劇的緊張を持ち込み、興趣を盛り上げることになる。そのために仕組んだ作為(無意識に近い作為)であつともいえる。

注8 『古事記』上巻「天の石屋戸」に、高天原の天照大神の聖所を犯した罪によってスサノヲノ命は、その罪を贖うために千位置戸(罪穢れを祓うために科された多くの物品)を負せられて、根の国へ下つていくが、荒人神としてのスサノヲ自身が贖物であつたという説がある。荒人神であると同時に贖物でもあるスサノヲは、罪穢れが外在化した最も古い例であり、その直系の子孫が小栗である。なお、小栗も死後荒人神に転生している。

(いわさき たけお・文学部講師)